

源氏物語

玉鬘卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

玉鬘

紫式部

與謝野晶子訳

火のくにおひいでたれば言ふことの

皆恥づかしく頬ほの染まるかな（晶子）

年月はどんなにたつても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女

であるが、源氏は夕顔の形見と思つて庇護するところがあつたから、今日では古い女房の一人になつて重んぜられもしていた。須磨^{すま}へ源氏の行く時に夫人のほうへ女房を皆移してしまつたから、今では紫夫人の侍女になつているのである。善良なおとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石^{あかし}夫人が愛されているほどには源氏から思われておいでになるであらう、たいした恋でもなかつた女性たちさえ、余さず将来の保証をつけておいでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらないでも、六条院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつも悲しんでいた。西の京へ別居させてあつた姫君がどうなつたかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやりにくい心弱

さと、今になって相手の自分であったことは知らせないようにと源氏から言われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかった。そのうちに、乳母めのとの良人おっとが九州の少貳しょうじに任ぜられたので、一家は九州へ下った。姫君の四つになる年のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣いて恋しがっていたが何のかいもなかった。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に育てていたい、卑しい自分らといっしょに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君のほうへほめかしたいとも思ったが、よいつてはなかった。その上母君の所在を自分らが知らずにいては、問われた場合に返辞へんじのしようもない。よく馴染なじんでおいでにならない姫君を、父君へ渡して立って行くのも、自分らの気がかり千万なこと

あろうし、話をお聞きになつた以上は、いっしょにつれて行つてもよいと父君が許されるはずがないなどと言ひ出す者もあつて、美しく、すでにもう高貴な相の備わっている姫君を、普通の旅役人の船に乗せて立つて行く時、その人々は非常に悲しがった。幼い姫君も母君を忘れずに、

「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがつて娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝つて行かなければならないのだから」

とも親たちは小言こごとを言つた。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色けしき

をお目にかきたい。けれども奥様がおいじになつたら私たちは旅に出
てないわけですね」

こんなことを言つて、京ばかりの思われるこの人たちの目には歸つ
て行く波もうらやましかった。心細くなっている時に、船夫^{かこ}たちは
荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまつた」という意味の唄^{うた}
を唄う声が聞こえてきて、姉妹^{きょうだい}は向かい合つて泣いた。

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる

来^こし方も行方^{ゆくへ}も知らぬ沖に出^いでてあはれ何処^{いづこ}に君を恋ふらん

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金^{かね}の岬^{みさき}を過ぎても「千早^{ちはや}

振る金の御崎を過ぐれどもわれは忘れずしがのすめ神」という歌のよ
うに夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しがった。少弐一家
は姫君をかしずき立てることだけを幸福に思つて任地で暮らしてい
た。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあつた。同じような女が
横に立っているような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病
気のようになることから、もう死んでおしまいになつたのであろう
と、悲しいが思うようになった。

少弐は任期が満ちた時に出京しようと思つたが、出京して失職して
いるより、地方にこのままいるほうが生活の楽な点があつて、思ひ
きつて上京することもようしなかつた。その間に当人は重い病氣に
なつた。少弐は死ぬまぎわにも、もう十歳とおぐらいになつていて、非常

に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦勞をなされることだろう、卑しい田舎いなかでお育ちになっていることももったいないことと思っておりますが、そのうち京へお供して参って、御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任せるといたしましても、京は広い所ですから、よいこともきつとあつて、安心がさせていただけるといまして、その実行を早く早くとあせるように思っておりますが、希望の実現どころか、私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言っていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供すること

と思え。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わずに、ただ大切にする訳のある孫であると言つてあつて、大事にかしずいているうちに、こんなふうでにわかになつたのであつたから、家族は心細がつて京への出立を急ぐのであるが、この国には故人の少弐に反感を持つていた人が多かつたから、そんな際に報復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかり暮らしている間にも、年月がどんどんたつてしまつた。妙齢になつた姫君の容貌ようぼうは母の夕顔よりも美しかつた。父親のほうの筋によるのか、氣け高い美がこの人には備わつていた、性質も貴女きじよらしくおおうであつた。故人の少弐の家に美しい娘のいる噂うわさを聞いて、好色な地方人などが幾人いくたりも結婚を申し

込んだり、手紙を送って来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないことであるとも思つて、だれ一人これに好意を持ってやる者はなかつた。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体からだにある孫ですから、結婚はさせずに尼にして自分の生きている間は手もとへ置く」

めのと乳母はこんなことを宣伝的に言っているのである。

「少弐の孫は片輪かたわだそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」

と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、

「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごくお小さい時にも非常におかわいがりになっていたのだから、今になつても決してそまつにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。その実現されるように神や仏に願を立てていた。娘たちも息子たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になっていった。大人になった姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。二十ぐらいになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になった。この少弐一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少弐の孫の噂を聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫の監と言って肥後に聞こえた豪族があつた。その国ではずいぶん勢いのある男で、強大な武力を持っているのである。そんな田舎武士の心にも、好色的な風流気があつて、美人を多く妻妾として集めた

い望みを持っているのである。少貳家の姫君のことを大夫の監は聞きつけて、

「どんな不具なところがあつても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」

と懇切に求婚をしてきた。少貳の人たちは恐ろしく思った。

「どんない縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろうとしています」

と中に立つた人から断わらせた。それを聞くと監は不安がつて、自身で肥前へ出て来た。少貳家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めるのであった。

「成功すれば、両家は力になり合つて、あなたがたに武力の後援を惜

しむものですか」

などと言ってくれる監げんに二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちも初めは不似合いな求婚者だ、お気の毒だと姫君のことを思っていました。考えてみると、自分たちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をすることも不可能だということがわかってきました。貴族の姫君だと言っても、父君が打ちちゃってお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になっている監と結婚のできるのはかえって幸福だと思いますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなつたのでしよう。逃げ隠れをなすつても何になるものですか。負けてなんかいませんから

ね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介^{ぶんごのすけ}だけは監の味方ではなかった。

「もつたいないことだ。少貳の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田舎武士^{いなかざむらい}などに嫁^{とつ}がせておしまいすることなどは堪えうることでないと思っっていることも知らずに、自身の力を過信している監は、手紙を書いて送ってきたりするのである。字などもちよつときれいで、唐紙^{とうし}に香の薰^{かお}りの染^しま

せたのに書いて来る手紙も、文章も物になってはいなかった。また自身も親しくなった少弐家の次男とつれ立って訪ねて来た。年は三十くらいたすの男で、背が高く、もののしく肥っている。きたなくは思われないが、いろいろ先入主になっていることがあって、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、か涸れ声で語り散らす。求婚者は夜に訪問するものになっているが、これは風変わりな春の夕方のことであつた。秋ではないが怪しい気持ち（何時いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）になったのかもしれない。機嫌きげんをそこねまいとして未亡人のおとどおとどが出て応接した。

「お亡かくれになった少弐は人情味のたつぷりとあるりっぱなお役人でし

たからぜひ御懇親を願いたいと思いながら、こちらの尊敬心をお見せできなかったうちにお気の毒に死んでおしまいになったから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思って、奮発して、一所懸命になつて、しいて参りました。こちらにおいになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申しますが、妻になつていただきたいのだ。我輩^{わがはい}は一家の御主人と思つて頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾人^{いくたり}ものつまらない女と関係してきたことで、いやがられているのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といつしよの扱いなどをするものですかい。我輩は姫君を^{きさき}後の位から落とすつもりはない」

などと勝手なことを監げんは言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何という不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体からだだとあきらめています、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございます」

と、おとどは言った。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目めくらでも、いざりでも私は護まもってあげます。我輩わがはいが人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおりに何事も加勢してくれませんかね」

などと監^{げん}は誇^うっていた。結婚の日どりも何日^{いっ}ごろというようなことを監^{げん}が言^いうと、おとどのほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によろしくないというような田舎めいた口実^{くじ}で断^きわる。縁側^{えんがわ}から下^おりて行く時^{とき}になつて、監^{げん}は歌を作^{つく}つて見^みせたくなつた。やや長く考^{かん}えてから言^いい出^です。

「君にもし心^{こころ}たがはば松浦^{まつら}なるかがみの神^{かみ}をかけ^{かけ}て誓^{ちか}はん

この和歌は我輩^{わがはい}の偽^{いつはり}らない感情^{かんじ}がうまく表現^{ひょうげん}できたと思^{おも}います」

と監^{げん}は笑顔^{えがお}を見^みせた。おとどはすべてのことが調子^{てうし}はずれな田舎武^{いんげぶ}士^しに、返歌^{へんか}などをする気^きにはなれないのであつたが、娘^{むすめ}たちに歌^{うた}を詠^よ

めと言うと、

「私など、お母さんだつてそうでしょう。自失している体ていよ」
こう言つて聞かない。おとどは興味の無い返歌をやつと出まかせふうに言つた。

年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見ん

先刻からの気味悪さにおとどは慄ふるえ声になつていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監げんがのつそりと寄つて来て、腑ふに落ちぬという顔をするのを見て、
おとどは真青まっさおになつてしまった。娘たちはあんなに言つていたもの

の、こうなつては氣強く笑つて出て行つた。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁の成立した時に、恨めしくお思いにならないかということを、もうぼけております母が神様のお名などを入れて、変に詠よんだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へのお愛想歌あいそなのであるが、

「ああもつとも、もつとも」

とうなずいて、監は、

「技巧が達者なものです。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいしたものではないことを我輩は知っている。軽蔑けいべつ

してはいけませんよ」

と言ったが、もう一首歌を作ろうとして、できなかったのかそのま
ま帰って行つた。次郎がすっかりあちらがたになつてゐるのを家族は
憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であつた。どうして姫
君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟までが監に
反対すると言つて、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監
の敵になつてはこの地方で何一つ仕事はできないだろう、手出しをし
てかえつて自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶はんもんをしたので
あるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子
を見ると、気の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思
われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹た

ちも馴染なじんだ良人おとを捨てて姫君について行くことになった。あてきと
言つて、夕顔夫人の使つていた童女は兵部ひょうぶの君という女房になつてい
て、この女たちが付き添つて、夜に家を出て船に乗った。大夫たゆうの監げんは
いったん肥後へ歸つて四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに來
ようとしているうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供
もおおぜいになつていて同行ができないのである。行く人、残る人なごりが
名残を惜しんで、また見る機会おきのないことを悲しむのであつたが、行
く人にとっては長い年月をここで送つたのではあつても、見捨てがた
いほど心の残るものは何もこの土地になかった。ただ松浦の宮の前の
海岸の風光と姉娘と別れることだけがだれにもつらかった。顧みもさ
れた。

浮島^{うきしま}を漕^こぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

初めのは兵部の作で、あとののは姫君の歌である。心細くて姫君は船でうつ伏しになっていた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追って来るであらうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といって、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であつたから、ちようど追い風も得て危ういほどにも早く京をさして走った。響^{ひびき}の灘^{なだ}も無事に過ぎた。海上生活二、三日ののちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走って来る」

などと言う者がある。惨酷さんこくな海賊よりも少貳しょうにの遺族は大夫たゆうの監げんをもっと恐れていて、その追っ手ではないかと胸を冷やした。

憂うきことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみなりけり

と姫君は口ずさんでいた。川尻かわじりが近づいたと聞いた時に船中の人はじめてほっとした。例の船子かこは「唐泊からどまりより川尻押すほどは」と唄うたっていた。荒々しい彼らの声も身に沁しんだ。豊後介ぶんごのすけはしみじみする声で、愛する妻子も忘れて来たと歌われているとき、その歌のとおりに自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪ぞうおの念から大夫の監は彼ら

に復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な考えで、脱出して来たと、こんなことが思われて、気の弱くなつた豊後介は泣いた。こちのさいしをむなくすつ「胡地妻子虚棄損」とこう兄の歌っている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分のしていることは何事であろう、愛してくれる男にわかにそむいて出て来たことをどう思っているであろうと、こんなことが思われたのである。京へはいつでも自分らは歸つて行く邸やしきなどはない、知人の所といつても、たよつて行つてよいほど頼もしい家もない、ただ一人の姫君のために生活の根拠のできていた土地を離れて、空想の世界へ踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさせられた。姫君をもどするつもりでいるのであると自身であきれながらも今さらしかたがなくてそのまま一行は京へはいった。九条に昔知つてい

た人の残っていたのを捜し出して、九州の人たちは足どまりにした。ここは京の中ではあるがはかばかしい人の住んでいる所でもない町である。外で働く女や商人の多い町の中で、悲しい心を抱いて暮らしていたが、秋になるといつそう物事が身に沁しみんで思われて過去からも、未来からも暗い影ばかりが投げられる気がした。信頼されている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職を求めてづるる手蔓も知らないのであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないことであつた。思慮の足りなかつたことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎党も何かの口実を作つて一人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであつた。無力な失職者になつている長男に同情したようなことを母のおとどが言ふと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護まもっていることができれば、自分の郎党などは一人もなくなってもいいのですよ。どんなに自分らが強力な豪族になったとしても、姫君をああした野蛮な連中に取られてしまえば、精神的に死んでしまったのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであった。

「神仏のお力にすげればきっと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣まいりをなさるがよいと思います。ここから近い八幡やわたの宮は九州の松浦、箱崎はこざきと同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになった願もありますから、神の庇護で無事に帰京しましたというお礼参りをなさいます」

と豊後介は言って、姫君に八幡詣やわたまいりをさせた。八幡のことにくわし

い人に聞いておいて、御師おしという者の中に、昔親の少弐が知っていた僧の残っているのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷はせの観音様は靈験のいちじるしいものがあると支那しなにまで聞こえているそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦勞をなすった姫君をきつとお憐みあわれになつてよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣はせもでを勧めて実行させた。船や車を用いずに徒歩で行くことにさせたのである。かつて経験しない長い路みちを歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行つた。自分は前生にどんな重い罪障があつてこの苦しみに堪えねばならないのであろう、母君はもう死んでおいでになる

にしても、自分を愛してくださるならその国へ自分をつれて行つてほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるようにしていただきたいと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然^{ばくぜん}と親というものの面影を今日^{きょう}まで心に作つて来ているだけであつたが、こうした苦難に身を置いては、いつそう親というものの恋しさが切実に感ぜられるのであつた。ようやく椿市^{つばいち}という所へ、京を出て四日めの昼前に、生きている氣もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫^はれて動かせない状態になつて椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党が二人、そのほかは僕^{しもべ}と子供侍が三、四人、姫君の付き添いの女房は全部

で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束つぼしょうぞくをしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手はでな長谷詣りの一行ではなかった。寺へ燈明料を納めたりすることをここで頼んだりしているうちに日暮れ時になった。この家の主人あるじである僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思っっているお客があつたのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

怒おこっているのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いていたが、僧の言ったとおりに参詣者の一団が町へはいって来た。これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かった。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、

きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があつてもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を搔かきながら、ひよこひよこついで追従しゅうをしていた。かわいそうな気はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面倒めんどうでもあつたから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えない部屋へやのほうへやったりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄つて、幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかった。遠慮深く静かで、双方ともつましい相い客になつていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であつた。年月がたつにしたがつて、いつまでも続けている女房勤めも気がさすように思われて、

煩悶はんもんのある心の慰めに、この寺へたびたび詣まいつているのである。長い間の経験で徒歩の旅を大儀とも何とも思っているのではなかったが、さすがに足はくたびれて横になっていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷おしきを持って言っていた。「これを姫君に差し上げてください。膳ぜんや食器なども寄せ集めのもので、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人ではないらしいと思った。幕の所へ寄つてのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなっている人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であつた。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあつたが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかつた右近は、夢のような気がした。主人である人の顔を見たく思つても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかつた。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、ひょうとうだ兵藤太と昔言われた人もこの男であろう、姫君がここにおいでになるのであろうかと思うと、気が急いで、そしてまた不安でならないのであつた。幕の所から三条を呼ばせたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないのを右近は憎くさえ思つたが、それは勝手すぎた話である。やっと出て来た。

「どうもわかりません。九州に二十年も行っておりまして卑しい私どもを知っておいでになるとおっしゃる京のお方様、お人違いではありませんか」

と言う。田舎風いなかに真赤まっかな搔練かいねりを下に着て、これも身体からだは太くなっていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかった。

「もっと近くへ寄って私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」

と言って、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打って言った。

「まああなたでいらっしやいましたね。うれしいって、うれしいって、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様

はいらっしゃいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であつたことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になっていることが右近の心を物哀れにした。

「お・と・ど・さんはいらっしゃいますか。姫君はどうおなりになりました。あ・て・きと言つた人は」

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出せないのである。

「皆、いらっしゃいます。姫君も大人おとなになつておいでになります。何よりお・と・ど・さんにこの話を」

と、言つて三条は向こうへ行つた。九州から来た人たちの驚いたこ

とは言うまでもない。

「夢のような気がします。どれほど恨んだかしのない方にお目にかかることになりました」

お・と・ど・はこう言つて幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあつた屏風^{びようぶ}などは取り払つてしまつた。右近もお・と・ど・も最初はものが言えずに泣き合つた。やつとお・と・ど・が口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらつしやる所を見たいと大願を立てましたがね、私たちは遠い田舎の人になつていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかつたのですが、奥様が捨ててお行きになつた姫君のおかわいのお顔を拝見しては、こ

のまま死んでは後世ごせの障りさわになると思いましてね、今でもお護りもして
います」

おとど・の話し続ける心持ちを思つては、昔あの時に気おくれがして
知らせられなかったよりも、幾倍かのつらさを味わいながらも、絶体
絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいのないことでございますよ。奥様はもう早くお亡かく
れになったのですよ」

と言つた。三条も混ぜて三人はそれから咽せ返むつて泣いていた。

日が暮れたと騒ぎ出し、お籠こもりをする人々の燈明が上げられたと宿
の者が言つて、寺へ出かけることを早くと急がせに來た。そのために
双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかった。

「ごいっしょにお詣り^{まい}をしましうか」

とも言ったが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、おとどのほうではまだ豊後介にも事実を話す間がないままに同時に宿坊を出た。右近は人知れず九州の一行の中の姫君の姿を目に探っていた。

そのうちに美しい後ろ姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹の単衣^{ひとえ}のような物を上から着て、隠された髪^{かみ}の透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お気の毒であるとも、悲しいことであるとも思つてながめたのである。少し歩き馴^なれた人は皆らくらくと上の御堂^{みどう}へ着いたが、九州の一行は姫君を介抱^{かいほう}しながら坂を上るの
で、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあつたお籠^{こも}り部屋^{べや}は右側の仏前に

近い所であつた。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか西のほうの間で、仏前に遠かつた。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と言つて、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとどは右近との邂逅かいこうを簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていまして不都合はだれもしないであらうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意氣にお寺の人などは軽蔑けいべつした扱いをしますから、姫君にもつたいなくて」

右近はくわしい話もしたのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拜んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢あわせくださいませとお願いしておりましたことをおかなえくださいましたから、今度は源氏の大臣おとどがこの方の子にしてお世話をなさりたいと熱心に思召おぼしめすことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈っているのであった。国々の参詣者さんけいが多かった。大和守の妻もやまとのかみ来た。その派手はでな参詣ぶりをうらやんで、三条は仏に祈っていた。

「大慈大悲の観音様、ほかのお願いはいっさいいたしません。姫君を大式だいしの奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていただきたいと

思います。それが事実になりました、私どもにも幸福が分けていただきました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うのにがにがしく思った。

「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だつてどうだったでしょう、まして今では天下の政治をお預かりになる大臣^どですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」

と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だつて何だつてだめですよ。大式のお館^{やかた}の奥様が清水^{きよみず}の観世音寺へお参りになった時の御様子をご存

じですか、帝様みかどの行幸みゆきがあれ以上のものとは思えません。あなたは思
い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言つて、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。九州
の人たちは三日参籠さんろうすることにしていた。右近はそれほど長くいよう
とは思つていなかったが、この機会おりに昔の話も人々としたく思つて、
寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。雑用をする
僧は願文がんもんのことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろのことを済
ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君ふじわらのるぎみという方のためにお経をあげてよくお祈りする
と書いてください。その方にね、近ごろお目にかかることができます
たからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。

「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りしているせいでしょう」

などとその僧は言っていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。

夜が明けたので右近は知った僧の坊へ姫君を伴って行った。静かに話したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずかしがっている姫君を右近は美しいと思った。

「私は思いがけない大きなお邸へお勤めするやしきことになりました、たくさん女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌ごきりように比べてよいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまたお美しいことはもつともなことです、そのお姫様はまたどんなに大事が

られていらっしやるか、まったく幸福そのもののような方ですがね、
こうして御質素なふうをなすっていらっしやる姫君を、私は拝見し
て、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣っていらっしやるように思
われませんのでうれしゅうございます。殿様はおっしやいますのです
よ、自分の父君の帝様みかどの時から宮中の女御やお后きさき、それから以下の女
性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお后の御美貌と自分
の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれを言うのであると思
われるって。私は拝見していて、そのお后様は存じませんけれど、お
姫様はまだお小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでし
うが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお
美しさの価値を十分ご存じでいらっしやるでしょうが、御自分のお口

から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなことも
お言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦になれたりして
もつたいたくありませんかなどと戯談じやうだんをね。お二人のそろいもそろつ
たお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あ
んな方はあるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様にど
こ一つ姫君は劣っていらっしやいません。物は限りがあつてすぐれた
美貌と申しても円光を後ろに負っていらっしやるわけではありません
けれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございま
しょう」

右近は微笑ほほえんで姫君をながめていた。少貳しょうじの未亡人もうれしそうで
ある。

「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一步で暗い世界へお沈め
してしまふところでしたよ。惜しくてもつたいなくて、家も財産も捨
てて頼たよりにしてよい息子にも娘にも別れて、今ではかえつて知らぬ他
国のような心細い氣のする京へ歸つて來たのですよ。あなた、どうぞ
いい智ちえ慧を出してくだすつて、姫君の御運を開いてあげてくださいま
し。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるで
しょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らつてく
ださいまし」

とおとどは言うのであつた。姫君は恥はずかしく思つて後ろを向いて
いた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使つてい

てくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、どうなさいましたろうと私が姫君のことをよく申すものですから、殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら知らせるがいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりっぱな方でも、今のお話のようなよい奥様や、そのほかの奥様も幾人いくたりかいらっしゃるのでしょうか。それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えてください」

とおとどが言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、死の床に泣いた人の源氏であつたことを話した。

「どうしてもお亡かくれになつた奥様を忘れられなく思召おぼしめしてね。奥様の形見だと思つて姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足り

ないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子を家へ迎えたように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおっしゃるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡^なくなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができないでおりますうちに、御主人が少弐におなりになったでしょう。それはお名を聞いて知ったのですよ。お暇乞^{いとまご}いに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになったのですよ。それでもまだ姫君をあゝの五条の夕顔の花の咲いた家へお置きになって赴任をなさるのだと思っていました。まあどうでしょう、もう一步で九州の人になっておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いっしょに念誦ねんずを行なったりしていた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であった。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「二もとの杉すぎのたちどを尋ねずば布留ふる川のべに君を見ましや

ここでうれしい逢瀬おうせが得られたと申すものでございます」
と姫君に言った。

初瀬川はやくのことは知らねども今日けふの逢瀬に身さへ流れぬ

と言つて泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であつた。これだけの美貌が備わつていても、田舎風のやばな様子が添つていたなら、どんなにそれを玉の瑕だと惜しまれることであろう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになつたものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になつた。母の夕顔夫人はただ若々しくおおような柔らかい感じの豊かな女性というにすぎなかつた。これは容姿に気高きのあるすぐれた姫君と見えるのであつた。右近はこれによつて九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋輩が皆不恰好な女になつていたのであつたから不思議でならなかつた。日が暮れると御堂に行き、翌日はまた坊に帰つて念誦に時を過ごした。秋風が溪の底から吹き上がつて来て肌寒さの覚えられる所であつたから、物寂し

い人たちの心はまして悲しかった。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲観をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になっていることがわかった上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという気になった。帰る時は双方でよく宿所を尋ね合つて、またわからなくなつてはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くないことを知つて、その人たちは力づけられた気がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得たいと思う心から急いだのである。門をはいるとすでにすべての空気に特別な豪華な家であることが感ぜられるのが六条院である。来る

車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをするのもまばゆい気のすることであると右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもって右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がって来た高級の女房が幾人いくたりもある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでとは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだらう。おもしろいことがきつとあつたらう」

などと例の困らせる氣の戯談じょうだんを源氏が言う。

「ちようど七日お暇いとまをいただいていたのでございますが、おもしろい

ことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お気の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで夫人にしていな
い昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで
話をお聞きになって不快がられないかなどと右近は迷っていて、

「まったくわしくお話を申し上げます」

と言つて、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。

灯^ひなどをともさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女王^{にようおう}は

二十七、八になった。盛りの美があるのである。このわずかな時日の
うちにも美が新しく加わったかと右近の目に見えるのであつた。姫君

を美しいと思つて、夫人に劣つていないと見たものの思いなしか、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人とはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思つた。寢室にはいつてから、脚^{あし}を撫^なでさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔^な馴染^みの者は氣心が双方でわかつていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていだいて私たちは結構なんですけれど、あの御戯談^{ごじやうだん}に困るだけね」

などと言っているのであつた。

「奥さんも昔馴染^などうしがあまり仲よくしては機嫌^{きげん}を悪くなさらない

い。決して寛大な方ではないから危あぶないね」

などと言って源氏は笑っていた。愛嬌あいぎょうがあつて常よりもまた美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに變つてしまつて、自宅でものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを樂しむ源氏であつたから、右近のような古女ふるおんなにも戯れてみせるのである。「発見したつて、どんな人かね。えらい修験者しゅげんじゃなどと懇意になつてつれて來たのか」

と源氏は言つた。

「ひどいことをおっしゃいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つけましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」

と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いにくくて、

「寂しい郊外に住んでおいでになったのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしてございますから、以前の話もいたしまして悲しゅうございました」

と右近は言っていた。

「もうわかったよ。あの事情を知っていらっしやらない方がいられるのだからね」

と源氏が隠すように言うと、

「私がおじゃまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」
と女王によおうは袖そでで耳をふさいだ。

「どんな容貌きりよう、昔の夕顔に劣っていない」

「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになったようでございます」

「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」

と右近が言うと、

「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」

わざと親らしく源氏は言うのであった。

その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合った。

「私はあの人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人に行くえを失ってしまったことを思つて暗い心に

なっていたのだからね。聞き出せばすぐにその運びにしなければなら
ないのを、怠っていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に
認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていら
れるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へは
いって行つては、結局また苦勞をさせることになる。私のほうは子供
の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは
言っておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかしずいて
みせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行き
そうであるとうれしかった。

「何も皆思召し次第でございます。おぼしめ内大臣へお知らせいたしますの

も、あなた様のお手でなくてはできないことでございます。不幸なお亡くなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑みながらも涙ぐんでいた。

「短いはかない縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まって来ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないことだけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な気の

することは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取るこ
とができればうれしいだろう」

こう言つて、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花すえつむはなに幻滅
を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふう逆境に育った麗人
の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思われない不安さ
から手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのであ
る。まじめにこまごまと書いた奥には、

こんなに私があなたのことを心配していますことは、

知らずとも尋ねて知らん三島江おに生おふる三稜みくりのすぢは絶えじな

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持つて行つて、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものらしく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特にすぐれた物を選んで贈つたのであつたから、九州の田舎に長くいた人々の目に珍しくまばゆい物と映つたのはもつともなことである。姫君自身は、こんなりっぱな品々でなくても、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言つて、贈り物を受けることを苦しく思うふうであつたが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言つて聞かせた。人々も横から取りなした。

「そうして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからもごく自然に認めていただくことができま
す。親子の縁と申すものは絶えたようでも絶えないものでございま
す。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈っていました結果はどう
でございます。神仏のお導きがあつたではございませんか。御双方と
もお身体からださえお丈夫でいらつしやればきつとお逢あいになれる時がまい
ります」

とも慰めるのである。まず早く返事をと云つて皆がかりで姫君を責
めて書かせるのであつた。自分はもうすっかり田舎者なのだからと姫
君は書くのを恥ずかしく思うふうであつた。用箋ようせんは薰物たきものの香を沁しませ
た唐紙とうしである。

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしかもかく根をとどめけん

62

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであつたが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあいた御殿もない。華奢かしやな生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には氣の毒である。中宮のお住居すまいになつている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいっているが、中宮の女房になつたように世間へ聞かれてもよろしくないはなぢるさとと源氏は思つて、少しじみな所ではあるが東北の花散里の住居の中の西の対は図書室になつているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませ

ようという考えになった。近くにいる人も気だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思ったのである。こうなってから夫人にも昔の夕顔の話を源氏はしたのであった。そうした秘密があったことを知って夫人は恨んだ。

「困るね。生きている人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますかね。たとえこんな時にでも昔のそうした思い出を話すのはあなたが特別な人だからですよ」

こう言っている源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく見ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくてもずい

ぶん嫉妬しつとをするもので、それに煩わわされている人が多いから、自分は

恐ろしくて、好色な生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然に

ほうしょう

放縦ほうじょうにもなって、幾人いくたりもの恋人を持ちましたが、その中で可憐かれんで可憐

でならなく思われた女としてその人が思い出される。生きていたなら

私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれ

も同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなとい

うような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

などと源氏が言うのと、

「でも、明石あかしの波にくらべるほどにはどうだか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛されている女であると夫人はねたんていた。小さい姫君がかわいいうをし

て前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもつともであるかもしれないと源氏は思った。それらのことは皆九月のうちのことであった。

姫君が六条院へ移って行くことは簡単にもいかなかった。まずきれいな若い女房と童女を捜し始めた。九州にいたころには相当な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第に雇って、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことがにわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほかにはだれもいなかった。京は広い所であるから、市女いちめというような者に頼んでおくと、上手うずに捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというようなことはだれにも知らせてないのである。いったん右近の五条の家に姫君

を移して、そこで女房を選^えりとのえもし衣服の仕度^{したく}も皆して、十月に六条院へはいった。源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのですが、子供もあつたので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかなければと思つて、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの子供にしてもらつているのですから、もう一人あつたつていいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さんがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですわね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができるのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまではあまり少なくて退屈でしたから、いいことだと思います、ごいっしょに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であることを知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょうか。同じ所へね。あまりに奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言つていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといつしよに六条院へ移つて来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎いなかびずに調べられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾あやそのほかの絹布類は呈供してあつたのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行つていた人たちは昔光源氏という名は聞いたこともあつたが、田舎住まいをしたうちにそのまれな美貌びぼうの人がこの世に現存していることも忘れていて今ほのかな灯ひの明りに几帳きちようの綻ほころびから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさ

えなつたのであつた。源氏の通つて来る所の戸口を右近があげると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」

と笑いながらはいつて、縁側の前の座敷へすわつて、

「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようにではないか。親の顔は見た
いものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思
いませんか」

と言つて、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥ずか
しがつて身体を細くしてすわっている様子に感じよさがあつて、源氏
はうれしかった。

「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われ
る」

と源氏が言うので、右近は燈心を少し搔き上げて近くへ寄せた。

「きまりを悪がりすぎますね」

と源氏は少し笑った。ほんとうにと思つてゐるような姫君の目つきであつた。少しも他人のようには扱わないで、源氏は親らしく言う。

「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられましたよ。こうして逢うことができても、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」

こう言つて目をぬぐう源氏であつた。それは偽りでなくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出しているのであつた。年を数えてみて、

「親子であつてこんなに長く逢えなかったというようなことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女のように恥ずかしがつてばかりいてよい年でもないのですから、今日までの話も私はしたいのに、なぜあなたは黙つてばかりいますか」

と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と言つてよいかわからぬほど姫君は恥ずかしいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたところから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」

とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音ごいんであつた。源氏は微笑を見せながら、

「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来た^{むく}酬いは私がしないでだれにしてもらえますか」

と言つて、源氏は聡明^{そうめい}らしい姫君の物の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は歸つた。

感じのよい女性であつたことをうれしく思つて、源氏は夫人にもそのことを言つた。

「野蛮な地方に長くいたのだから、氣の毒なものに仕上げられているだろうと私は輕蔑^{けいべつ}していたが、こちらがかえつて恥^{はづか}ずかしくなるほどでしたよ。娘にこうした麗人を持つているということを経^お間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿^{ひょうぶきょう}の宮などに懊惱^{おうのう}をおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家^{うち}ではきまじめな方面しか見せないの

も妙齡の娘などがないからなのだ。たいそうにかしずいてみせよう、まだ成っていない貴公子たちの懸想^{けそう}ぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言うのと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい方」

と女王^{によおう}は言う。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱うのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだった」

夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。源氏は硯^{すずり}を手もとへ引き寄せながら、無駄^{むだ}書きのように書いていた。

恋ひわたる身はそれながら玉鬢^{たまかづら}いかなる筋を尋ね来つらん

「かわいそうに」

とも独言ひとりごとしているのを見て、玉鬘の母であつた人は、前に源氏の

言つたとおりに、深く愛していた人らしいと女王は思った。

源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、氣をつ
けて交際するがよいと言つたので、中将はすぐに玉鬘の御殿へ訪ねたず
行つた。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置き
くださいまして、御用があればまず私をお呼びになつてください。こ
ちらへお移りになりました時も、存じないものでお世話をいたしませ
んでした」

と忠実なふうに言うのを聞いて、真実のことを知っている者は

きまり悪い気がするほどであつた。物質的にも一所懸命の奉仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであつたようにおとどなどは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高い家けだかにいて、親兄弟である親しい人たちは風采ふうさいを始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなつてはじめて三条も大式を軽蔑けいべつしてよい氣になつた。まして大夫たゆうの監げんは思い出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介ぶんごのすけの至誠たまものの賜物であることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言つて豊後介を賞ほめた。確しかとした規律のある生活をするのにはそれが必要であると言つて、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上りの失職者になつてい

た豊後介はにわかに朗らかな身の上になった。かりにも出入りする便宜などを持たなかった六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思っていた。これらもすべて源氏が思いやり深さから起こったことと言わねばならない。

年末になって、新年の室内装飾、春の衣裳いしやうを配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱った。どんなに思いのほかによい趣味を知った人と見えても、またどんなまちがった物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあって、玉鬘のほうへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱいに念を入れて作り出した厚織物の細長や小桂こうちぎの仕立てた

のを源氏は手もとへ取り寄せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選^えって贈^えることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上^{のり}げ場から仕上がって来ている糊をした打ち絹も源氏は見比べて、濃^{べに}い紅、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣櫃^{ころもびつ}、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房たちがそばにいて、これをそれに、それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているの

あつた。夫人もいっしょに見ていて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合
いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れな
のはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑つて、

「素知らぬ顔であなは着る人の顔を想像しようとするのですね。そ
れにしてもあなたはどれを着ますか」

と言つた。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自信も出ません」

さすがに恥ずかしそうに言う女王であつた。紅梅色の浮き模様のあ
る紅紫の小桂こけいぎ、薄い臙脂紫えんじむらさきの服は夫人の着料として源氏に選ばれた。

桜の色の細長に、明るい赤い搔練かいねりを添えて、ここの姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になった、織り方にたいした技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手はででない物に濃い紅の搔練を添えたのが花散里はなちるさと。真赤まっかな衣服に山吹やまぶきの花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるのである。内大臣がはなやかできれいな人に見えながらも艶えんな所の混じっていない顔に玉鬢たまかざらの似ていることを、この黄色の上着の選ばれたことで想像したのであった。色に出して見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知った。

「もう着る人たちの容貌きりようを考えて着物を選ぶことはやめることにしよ

う、もらった人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあつて、人の顔は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘花すえつむはなの着料に柳の色の織物に、上品な唐草からくさの織られてあるのを選んで、それが艶な感じのする物であつたから、人知れず微笑ほほえまれるのであつた。梅の折り枝の上に蝶ちようと鳥の飛びちがつている支那風しなな氣のする白い桂うちぎに、濃い紅の明るい服を添えて明石夫人あかしのが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような氣が少しした。空蟬うつせみの尼君には青鈍色あおにびの織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあつた薄黄の服を添えて贈るのであつた。同じ日に着るようにとどちらへも源氏は言い添

えてやった。自身の選定した物がしっくりと似合っているかを源氏は見に行こうと思うのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使
いへ出した纏頭てんとうもさまざまであつたが、末摘花は東の院にいて、六条
院の中のことでないから纏頭などは気のきいた考えを出さねばならぬ
のに、この人は形式的にするだけのことはせず、にいられぬ性格であつ
たから纏頭も出したが、山吹色の桂うちぎの袖口そでぐちのあたりがもう黒ずんだ色
に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘花すえつむはな女王の手紙
は香かおの薫りのする檀紙だんしの、少し年数物になって厚く膨ふくれたのへ、

どういたしましょう、いただき物はかえって私の心を暗くいたしま
す。

着て見ればうらみられけりから衣かへしやりてん袖を濡らして

と書かれてあつた。字は非常に昔風である。源氏はそれをながめながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があつたのかというふうに夫人は見ていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭のま^{てんとう}ずいを見て、機嫌^{きげん}の悪くなったのを知り、使いはそつと立つて行つた。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせられる人であると源氏は思っていた。

「りっぱな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌詠^よみはから衣、袂濡^{たもと}るという恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まっていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないと

ころがえらいものだ。御前などの歌会の時に古い人らが友情を言う言葉に必ずまどい・という三字が使われるのもいやなことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手を悪く見て仇人あだびとという言葉を三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば前後は何とでもつくと思ったものらしい」

などと源氏は夫人に語った。

「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあるのを始終見えて、その中にある言葉を抜き出して使う習慣のついてい
る人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。常陸ひたちの親王
のお書きになった紙屋紙かんやがみの草紙くさしというのを、読めと言って女王にようおうさんが
貸してくれたがね、歌の髓脳ずいのう、歌の病やまい、そんなことがあまりたくさん

書いてあったから、もともとそのほうの才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくなる見込みはないから、むずかしくてお返ししましたよ。それに通じている人の歌としては、だれでもが作るような古いところがあるじゃないかね」

滑稽こっけいでならないように源氏に笑われている末摘花の女王はかわいそうである。夫人はまじめに、

「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せてあげになるほうがよかったでしょうにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手へたな方よりも、全然知らない私などはもつとひどく拙つたないわけですよ」

と言った。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのことに熱中して専門家的になっていることが感じのいいものではない。といって、どの芸にも門外の人であることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穩で瑕きずのない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言っていて、もう一度末摘花へ返事を書こうとするふうのないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになったのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言って、書くことを勧めていた。人情味のある源氏であつたか

ら、すぐに返歌が書かれた、非常に楽々と、

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

ごもつともです。

という手紙であつたらしい。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
